

紙素材を用いた幼児の造形活動の 指導法に関する実践的研究 —体験的に考察する学習活動を中心として—

堀 館 秀 一

1. 背景

現行の幼稚園教育要領（文部科学省 2008）には、幼児たちに対し幼稚園での生活の中で育つことが期待される心情、意欲、態度など生きる力の基礎となりえることがねらいとして示され、このねらいを達成していくため指導する事項、幼児が身に付けていくことが望まれるものが内容として示されている。感性と表現に関する領域である「表現」について、「第 2 章 ねらい及び内容領域「表現」では、冒頭で「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とし、次のように目的や内容を示している。

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽

しさを味わう。

また、幼稚園教育要領「第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本」では、「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」とし、教育に際して重視すべき事項として、以下のように掲げている。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

その際、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

教師である保育者は幼稚園教育要領に示されている通り、幼児の感性や表現力を養い、創造性を豊かにすることを望み、活動する存在である。当然、その育ちを支援し、引き出す側の保育者の高い能力が求められる。幼児の活動を豊かにしていくための役割を果たしていくことに必要なものは、先ず保育者自身が感性や表現力、創造性が豊かであること、そのように幼児と接するために、日常的にアンテナを張り巡らせ、努力を怠らないことではないだろうか。

幼児の育ちを支援し、引き出すための努力として、具体的な手立ては様々な考えられるが、活動の事前準備として行われる教材の検証もその一つである。行われる活動全体を検証していくことはもちろんであるが、活動が展開される環境やその一部分でもある様々な素材の検証も大切な事であると考ええる。保育者自身の素材に対する質の高い経験やより豊富な知識は、幼児の造形遊びを支援しより豊かな内容とする上で必要なものと考ええる。

幼児が遊びを通して触れ合う素材には、生活場面から様々なものが考えられるが、中でも身近で触れ合う機会が多い素材としてあげられるものの身近な代表的な存在として「紙」がある。「紙」に焦点を当て造形活動を振り返ってみると、スケッチブックや画用紙に鉛筆やクレヨン等の描画材を用いて何かを描いたり、また折り紙を使用し折るというプロセスを経て造形物を作り出したり、お菓子の箱等を組み合わせ時にはハサミで加工して目的のものを上げる工作遊びなど、工夫次第では様々な遊びの活動に取り入れることができ、その点を考慮すると「紙」を使用した幼児たちの遊びは数多くのバリエーションを考えることができる。この「紙」を活用した様々な遊びは、もちろん他の4領域と密接に関連しながら展開される。

筆者はこれまで、担当する授業である「保育内容F（造形表現）」において、受講生に対して、過去の教育課程の中で経験してきた造形活動全般のことや「紙」を使用した遊びや造形活動、その時使用した「紙」の種類について、確認してきた。その傾向として、先ず漠然としたイメージで括られた「画用紙」という言葉が多く出されている。そして、「描く（書く）活動」「折り紙」「工作の活動」等を記憶してはいるものの、それぞれの活動の中でどのような材質の「紙」を使用していたかはよく覚えていないとの内容が多い。当然、時間の経過による記憶の曖昧さによる影響も考えられる。また、それぞれの学生がたどった、家庭での造形的遊びの環境も含めた、造形活動の経験、種類や数が関係していることもあるだろう。しかし、幼・小・中・高と課程が進むにつれて、課外の活動も含め、造形活動や美術的な表現活動を行う機会が減っているという学生が多く見受けられる。

実際に様々な材質の素材と触れあう体験を通して、各造形材料を再確認し素材の持つ様々な可能性を体験的に考察する機会は、幼児たちの活動を支援するための事前準備であることはもちろん、幼児教育に携わる者の造形感覚を養う貴重な時間でもあると考える。そこで本研究では、「紙」素材と触れ合う体験を通して、素材の可能性について考察する「体験的素材考察活動」を提案し、授業において実践した。

2. 本研究の目的と方法

本研究の目的は「体験的素材考察活動」を提案するとともに、授業において実践して、その効果を検証することである。仮説として、「体験的素材考察活動」が将来の保育者である学生に、以下の機会を与えることが考えられる。

1. 造形材料としての紙を再確認し、素材の持つ様々な可能性を体験的に考察する
2. 視覚以外の感覚（触覚・聴覚・嗅覚等）も働かせて紙について感じ考え、紙が見せる様々な表情・姿に気づく
3. 造形活動の教材研究の初歩を体験する

検証の方法として、筆者が担当する「保育内容F（造形表現）」において、複数年

度にわたって「体験的素材考察活動」を実践し、学生の様子やワークシートの記述内容から、その効果を測る。

3. 体験的素材考察活動

3-1. 概要

様々な素材と関わってきた保育者の質の高い経験や素材に対するより豊富な知識は、幼児の内容豊かな造形遊びを支援する上で必要なものと考ええる。将来の保育者である学生たちが、幼児の自分なりの表現を通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすることを大切にしたい造形（表現）活動に携わるにあたり、まず、将来の保育者である学生が、自身の豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする日々の経験を行う必要がある。

「体験的素材考察活動」では、素材として先述の通り、生活の中で最も身近な「紙」を扱う。「紙」という素材に実際に触れながら、その経験をもとに「紙」について再確認し、また考察を加えていく活動を行う。実際に触れながら考えるため、「紙」に対して視覚的にアプローチするだけではなく、そのほかの感覚（触覚・聴覚・嗅覚等）も働かせ「紙」について感じ考えること、またそれぞれが日常の中で体験してきた「紙」というものが見せる様々な表情・姿への気づきを期待する。換言すると、経験に裏付けられた素材（材料）に対する知識の習得と、素材に触れあう中で感覚的に伝わるものを、五感を働かせ意識的に感じとることの経験である。それまでの何気なく素材に対峙していた無意識な関わりを、意識的な関わりへ変化させていくことは、幼児の造形活動（遊び）を支える保育者の造形的基礎力に厚みを付け、それを発展的に支えるための応用力の涵養にもつながるものと考ええる（図1）。

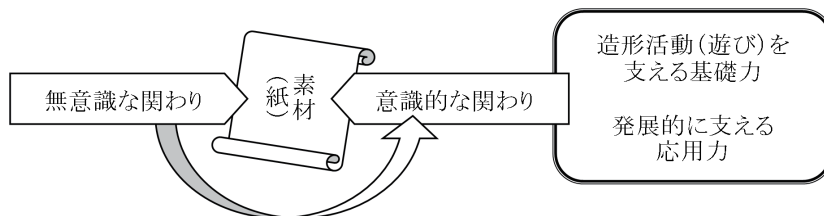


図1 素材との関わりと基礎力・応用力の関係

この活動は、「紙」を扱う諸々の造形活動の教材研究の一環としての役割も兼ねる。ここでは将来の保育者である学生自身が造形活動（遊び）に使う素材に触れながら、その素材について多角的に知り、また感覚的に感じることを通して、幼児が活動時に感じるであろうことの事前検証を含めた、教材研究の初歩を体験する。幼児が遊びの中

から学ぶモノ・コトの質的要素の向上や遊びの中から様々な経験を積み重ねていく幼児の遊び（学び）を系統立てて考え、支援する力にもつながっていくことが期待できる。

3-2. 活動の流れ

体験的素材考察活動は、A. 紙についての振り返り、B. 紙製品の想起、C. 紙の性質についての分析、D. 紙を使用した活動のイメージ、E. 全体の振り返り、の5段階から構成され、1コマ90分の授業で完結する。以下では、各段階について、具体的に説明する。

A. 紙についての振り返り

A-① 過去教育課程の中でどのような「紙」を使用した造形的活動を行ってきたか記憶を振り返る。個人活動。

A-② 重複した発言が無いように振り返った紙を使用した造形活動をクラス全体に発表する。

B. 紙製品の想起

B-① 教育課程の視点を取り払い、身の回りにあり造形活動で使いそうな紙製品にどのようなものがあるかを経験と知識を生かしながら、思いつく限り、個人でワークシート（図2）に書き出す。

私たちの身の回りにあるもので、子どもたちの遊びの活動に利用できそうな紙でできたものといえば？
思いっただけ余白に書き出してみる

図2 ワークシート「身近な紙素材といえば…」

B-② ワークシートに書き出した紙製品についての情報を、テーブルごとのグループで共有し、気づきを促す。グループ活動。

B-③ どのくらいの数の紙製品が思いつけたか、その数と具体的な紙製品名についてこちらで読み上げた項目と比較しながら、クラス全体で情報の共有と新たな気づきを促し、様々な種類の紙製品が活用可能であることを確認する（図3）。書画カメラで撮影したものを大型モニターに投影しクラス全体で共有する。様々な種類の紙製品が活用可能であることを知るとともに私たち人間の文化を

支えてきた「紙」そのものが秘めた可能性を確認する。紙以外にも様々な身の回りの素材が活動の材料になることもここで確認する。

和紙（半紙、障子紙、お花紙など） ・洋紙（各種画用紙、上質紙、コピー用紙など）
 折り紙、色紙（ラシヤ紙など）、はがき、新聞紙（英字新聞も含む）、広告チラシ、カレンダー
 いらなくなった雑誌、包装紙、ダンボール、厚紙
 トイレットペーパー、ティッシュ、紙ナプキン、ペーパータオル、紙紐
 お菓子などの箱類、パックドリンク容器、紙コップ、紙皿、ラップなどの芯材
 封筒、各種紙袋・紙バッグ など

図3 身近な紙素材の例（一部で重複あり）

C. 紙の性質についての分析

- C-① ここまでの AB の活動で得た結果を生かしながら、「紙」そのものに焦点を当て、その性質や、「紙」とはどのようなものなのかを造形活動に使用するという枠にとらわれずに思いつく限り、個人で書き出していく。
- C-② 事前に準備しておいた様々な種類のサンプル紙をそれぞれ触りながら、改めて C-① と同じく「紙」についての思いつく言葉を、個人で書き出していく（図4）。この時思いついたことは言葉として発声しグループの中で呟き、情報が共有できるようにする。グループ内の他の学生の呟きを聞き参考にしながら、個人で思いつく限り書き出していく。サンプル紙は折り曲げたり、破いたりしてよい。なお、実践では、再生画用紙、シリウス水彩紙、ペーパーキャンバス、段ボール、梱包用片段ボール、3mm 硬質厚紙、コピー用紙、新聞紙、ティッシュペーパー、お花紙、半紙、トレーシングペーパーを提供した。

紙は〇〇〇〇。（紙の性質や性能、紙から伝わる感覚、紙で何ができるかななどを、書き出してみる）

うすい	柔らかい	生活に必要	水に強い	いろんな色に染まる	音が出る
でんぱん	丸められる	文明	折れる	鉛筆に書ける	
つるつる	切れる	芸術	穴があく	破れる	
くしゃくしゃ	固い	カワイイ	身近にある	飛び出す	
自由自在	木からできている	重なりと固い	赤がる	染まる	
ふくら	さらさら	（みず）	はみみで書ける	びりびり	
ボール	やわらかい	リサイクルできる	丸める	折れる	
便利	白い	手が切れることもある	こわい	紙の目がある（繊維がある）	
折れる	ちぎれる	食べられない	染まる	人さ	
ガラガラ	しゃがみ	有機物	古くなる	フィットする	

51

図4 ワークシート「紙は〇〇〇〇」の例（グループ共有後）

- C-③ グループ内で書き出した項目数とその言葉を確認しながら、クラス全体で情報を共有する（図5）。こちらで準備した項目と比較しながらクラス全体で情報

の共有と新たな気づきを促す。「紙」を表す言葉を確認する中で、「紙」の様々な性質や魅力を感じ取ることを期待する。

過去の経験や触る感覚を通して分かることの例 (※分類は仮のもの)

使用に関して表裏がない			面	表と裏がある		
		方向性がない	紙の目	方向性がある		
		ザラザラ	表面	ツルツル		
	破れにくい	切れにくい	強度	ちぎれる	はさみで切れる	破れる
		加工にくい	加工	加工しやすい		
		硬い	強度	柔らかい	結べる	
光を通さない	重い	厚い	厚み・重ね	薄い	軽い	光を通す
		強い	強度	弱い		ペラペラ
	叩くと痛い	指が切れる	安全性		柔らかいと痛くない	
	角に注意	燃える		燃えない(燃えにくい)		
			接着剤などで			
		剥がれる	繋ぐことが可能	貼り合わせる		
	厚くても弱い	折れる(折る)	弾力・強度	折れる(折る)	薄くても強い	
		シート/板状	平面から立体へ	筒状になる	箱状	複雑な形状
穴が開けにくい	丸まらない	ペコペコ硬皺	形状	くしゃくしゃ柔皺	丸める	穴が開く
水中でドロドロ	濡れると弱い	沈む	水分・湿気	浮かぶ		
		透過		保湿・吸水	にじむ	
		縮む		伸びる		
				染まる	汚れを吸い取る	
色が塗れる	字が書ける	思いを伝えるメディア	生活・保温・断熱	暖かい	服になる	帽子になる
				容器	袋	包む
	転がる	落ちる	重力・弾力	飛ぶ	跳ねる	
	コロコロ	ストン		シュッ	ビョン/ビヨン	
	ゴロゴロ	くるくる		フワフワ		
				ひらひら		
		風を受ける	風力	風を生み出す		
音を集める(形状)	音を遮る		音	音が出る	クシャクシャ	笛になる
				ビリビリ	パン	ビー
				バリバリ	シャー	ビー/ブー
				バリバリ	シュッ	

図 5 「紙」を表す言葉をまとめた一例 C-③

D. 紙を使用した活動のイメージ

D-① ちぎる、切り分ける、折る、重ねる、組む、など、「紙」を使用した造形遊びに関係する加工の為の基礎的な技法(結城 2010)を、言葉と視覚イメージで確認しながら「紙」を使用した活動のイメージを膨らませる(図 6)。

工作

ちぎる、切り分ける(切り離す)、切り抜く(穴をあける)、切り刻む など
折る、曲げる、皺にする、膨らませる、へこませる
重ねる、つなぐ、差し込む、編む(編み込む)、組む(切込みで組む)

接着 描画 その他

かく、写す(透かす)、貼る、ほぐれた繊維が水と混ざる、…など

図 6 ワークシート「言葉による「紙」を扱う基本技法」の例

E. 全体の振り返り

E-① 活動全体を振り返り、活動を通しての気づきや感想を振り返りシートにまとめる。

活動を通しての気づきや感想をまとめて記入する

図7 ワークシート「活動を通した気づきと感想」

4. 体験的素材考察活動の実践の結果と考察

2010年度以降、「保育内容F（造形表現）」において、体験的素材考察活動を7回実践してきた。これまで提出された振り返りシート（図7）の中で、2章で掲げた仮説に関連する代表的な記述（視点）と、それらに関する考察を以下に記す。

4-1. 「造形材料としての紙を再確認し、素材の持つ様々な可能性を体験的に考察する」について

- ・今まで（過去の教育課程の中、または日常生活において）紙という身近にある素材についてここまでじっくりと考えることはなかった。経験してきたはずなのに忘れていた部分が多いことや紙についての新たな発見があった。
- ・紙についての活動や考えることを通して、私たちの生活文化は、紙によって非常に多くの部分を支えられているかもしれないと思った。

学生は「紙」に触れあう日常的な経験の中で、当たり前の事象として無意識にやり過ごしてしまっていると思われる部分を、この体験的考察活動を通して意識的に捉えることを経験し、その過程で様々なことを感じていたようである。中でも生活の中において身近にごく当たり前に存在していた既知の素材に焦点を当て、五感を働かせてじっくり考える体験に、驚きを隠せない部分があったようである。ここでの経験は「紙」にまつわる様々な過去の記憶（感覚）の掘り起こしや、過去に経験してきた内

容をあらためて想起する機会にもなっていた。中には、過去において「紙」に触れあう中で感じていたはずの感覚を、この活動を通して初めて感じたかもしれないという感想を持つ学生もいた。本活動に使用した「紙」という素材だけではなく、幼児が活動の中で使用する他の様々な素材に対しても同様に意識的に捉えていくことで「新たな素材の見え方があるのでは？」と探求する姿勢も、活動する学生の中に見て取ることができた。また「紙」という素材を単に造形活動のための一素材として捉えるだけではなく、その素材を用いた日常生活において使用される加工品としての「紙」の視点や、歴史の中で受け継がれてきた素材としての視点も含めた、より広く柔軟に捉え方も促されたと推察される。

4-2.「視覚以外の感覚（触覚・聴覚・嗅覚等）も働かせて紙について感じ考え、紙が見せる様々な表情・姿に気づく」について

- ・ 日本文字や絵をかくために当たり前のように使用している「紙」をちぎったり、丸めたり、折ったり、など「紙」と触れ合う中で、紙はとてもたくさんの感覚に働きかけてくる素材であると感じた。
- ・ 紙を「破く」「丸める」時、音が聞こえていたはずなのに、「音が鳴る」という友人の意見を聞くまでその音を意識することができなかった。

個人活動の中では意識的に捉えることができなかった感覚や事柄も、グループ内やクラス全体で情報共有する時の傾聴の中において、互いに自分の中になかった視点を知ることができ、また獲得した他者の視点をもとに「柔らかい紙ではどうだろう？」「硬い紙では？」と連鎖する形で、相互の気づきを発展させる姿も確認できた。

素材は私たちが思う以上に多くの感覚に働きかけてくる。「紙」を例にするとまず、色や明るさ、質感などは視覚的に働きかけ、手触りの中感じ取ることが可能な質感、重さ、温度などの触覚的要素、新聞紙など印刷された紙ではインクの臭いが嗅覚を刺激する。「紙」と触れ合う際には様々な音も聞こえてくる。この活動の中でも聴覚に働きかける「紙」の音に関しての気づきも大変に興味深いものであった。活動時に「紙」を折ったり、丸めたり、ちぎったり、思いっきり破いたり学生たちの「紙」への関わり方は様々であるが、その際、教室には「紙」がこすれる音、破ける音で騒然としているにもかかわらず、その音に気付くことのできない学生も多く存在する。特殊なケースではあるが、聴覚に働きかける「紙」にまつわる音についての学生間の気づきが全くなかった実施年もあった。

4-3.「造形活動の教材研究の初歩を体験する」について

- ・ 道具（ハサミ）を使用せずここまで紙で楽しめるとは思わなかった。
- ・ 紙を使用してこの活動のように自由に触れあう経験が自分の子供のころにあっ

たかどうか記憶にない。大人の自分にもとても楽しめた。子供たちにもいろいろと経験させてあげたい。

- ・「紙」に触れあう遊びを通して、子供たちにもより多くのことを体験し感じてもらいたい。

熱心にこの活動に取り組む学生たちは、自分の「手」という基本道具を駆使しながら、この活動が教材研究（検証）の一部を担う活動であるということを飛び越え、活動の中で気づいた（感じた）ことを足掛かりとしながら「紙」と対話するかのように遊び始める。その遊びを通し「紙」についての様々な性質に気付いたり、また座席の隣で活動する友人が「紙」で行っていることが気になり真似をして自ら再現してみたりと、子どもが遊ぶ姿に負けないくらいの状態で活動が展開していく様子が見て取れた。素材に向き合いながら遊ぶ行為は、子供だけではなく大人になった学生にとっても心動く楽しい活動であるようだ。子供や大人という年齢や経験を問わず、その遊びの中で感じた楽しさ、感動する姿には嘘はないであろう。その様な活動風景の中、その感動と楽しさを「紙」素材はもちろんのこと、子どもたちの遊び（活動）を支える様々な素材についても子どもたちが活動する園の生活環境の中で遊び（活動）を通した経験として学べるよう支援していきたいという意見もあった。

以上のように、体験的素材考察活動を通して、意識的に「紙」に関するモノゴトをとらえ捉える視点が学生の中に芽生え、それぞれが手ごたえを感じる姿が見られた。それぞれの仮説に関して、「体験的素材考察活動」が学生に考察や気づき、体験の機会を与え、学生は新たな知識を得るとともに、「紙」に対する考え方や態度が変容したと言える。

しかしその一方で、「A. 紙についての振り返り」の活動での、過去における「紙」素材との関わり方や経験の記述では、「こんな紙をこんな風に使ってこんな遊びをしたのを思い出した」というものが提示されるのではなく、「絵を描くには絵を描くための紙、おりがみ遊びには折り紙、それが当たり前だった」「いろいろな紙に触ったり使ったりした記憶がない」「子供の頃、紙をもっと感じながら遊んでみたかった」「叱られるので紙を散らかしながら遊べなかった」などの内容が見られた。1章で述べたように「造形活動や美術的な表現活動を行う機会が減っている」と感じている学生が増えているが、加えて、「紙」素材で遊んだ際の関わり方や経験の記憶とその印象が、一昔前よりも薄れていることがこれらの記述から見受けられる。振り返りシートの記述内容だけでは詳細を把握しきれないが、近年の学生は幼少期において、「紙」と自由に関わるための環境が乏しく、造形的な素材として「紙」で遊ぶ機会が減少してきているのかもしれない。

5. 今後の課題

A. 紙についての振り返り、B. 紙製品の想起、C. 紙の性質についての分析、D. 紙を使用した活動のイメージ、E. 全体の振り返り、の5段階から構成される体験的素材考察活動について、ワークシートの記述内容から、「体験的素材考察活動」は学生に考察や気づき、体験の機会を与え、その結果、学生は新たな知識を得るとともに、「紙」に対する考え方や態度が変容したと言える。ただし、今回は量的な検証を行っていないため、今後、質問紙調査やインタビューを行い、量的に検証する必要がある。

体験的素材考察活動については、模索し、試行錯誤しながら実践しているのが現状である。1 講義時間（90 分）の中で本活動を展開しているが、その中でも「C. 紙の性質についての分析」の活動を中心に、「紙」に触れる中で考えることができる時間を十分に確保することが大切であると感じている。全体の時間配分にも関係するが、活動内で発生する意見や情報の共有（発言時間や、人数、記入の際に使用するワークシート）にはまだまだ工夫の余地がある。

「C. 紙の性質についての分析」については、実際に体験を通して感じ、また、考えることの大切さを体験できる活動であるが、その点を踏まえると「D. 紙を使用した活動のイメージ」は、現状では「紙」を加工する基本的な技法を知る内容までにとどまっている。その技法をもとにして、学生それぞれが体験的に知識として獲得した技法を咀嚼し、整理するための造形活動を行う機会が必要であるとも考える。

本研究では、素材として「紙」を扱っているが、その他様々な素材についても、保育者（学生・教師）は、このように実際に現物に触れながら行われるプロセスを通して、幼児が遊び（造形活動）の中で扱う素材（材料）について感覚的な要素も含めて多角的に知り、その素材（材料）の特性に加え、どのようなことができるのか、できないのかについての視点や、安全性（守るべきこと・してはいけないこと など）を再確認することができる。これは幼児の安全かつ主体的な活動環境を構成していく上でも大切な視点である。「紙」以外の素材や用具についても同様な活動を行う機会を持つことで、様々な素材に対する知識の獲得や基本的な用具の使用方法を含めた造形能力を育む自発的な姿勢を期待できるのではないかと考える。

まだまだ試行錯誤の段階ではあるが、これらの点を踏まえつつ今後も幼児の造形活動を支える保育者の視点を育むために、具体的な造形活動の題材と運動させ、より充実した学生による主体的な学びの場が提供できるよう内容を検討し実践していきたい。

引用・参考文献

- 文部科学省, 幼稚園教育要領, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf, 2008 (閲覧日 2017 年 4 月 26 日)
- 浅見均編著「子どもと表現」, 日本文教出版, 2009
- 花原幹夫編著「保育内容 表現」, 北大路書房, 2005
- 熊本高工編著「表現の指導 造形」, 同文書院, 1990
- 黒川健一・小林美実編著「保育内容 表現」(第2版), 建帛社, 1999
- 槇英子著「保育をひらく造形表現」(第2版), 萌文書林, 2010
- 無藤隆監修, 浜口順子編者代表「事例で学ぶ 領域 表現」, 萌文書林, 2007
- 結城孝雄, 大学造形美術教育研究第8号—養成課程における授業改善の試み, 全国大学美術教育教員養成協議会, pp.21-25, 2010

A Practical Study on Teaching Method for Infants’

Formative Activity Using Paper Material:

Based on Learning Activities through Experiential Consideration

Hidekazu HORITATE

The purpose of this study is to propose “experiential material consideration activities,” in which learners consider formative materials, and to practice it in class and to verify its effect. Because paper is the most familiar in daily life, in the practice, the learners deal with paper as a material, touch, reaffirm about and consider paper. The activities consist of five phases: A) reflecting on paper, B) recalling paper products, C) analysis on the properties of paper, D) imaging on paper-based activities, E) overall reflection. It is completed in 90 minutes class.

Since 2010, the activities have been practiced seven times in “Childcare contents F (formative expression)”. The descriptions of worksheets reveals that “experiential material consideration activities” gives students an opportunity to notice, consider and experience so that learners get new knowledge, think about paper, and change their attitude. However, quantitative verification, such as questionnaire surveys and interviews, are need in the future because they have not been carried out in this study.